いじめを防ぐ道徳授業†

―教材の開発を中心に―

喜田村徳子*・上原　秀一**
宇都宮市立姿川中学校*
宇都宮大学教育学部**

宇都宮大学教育学部教育実践紀要　第4号　別刷

2018年2月28日

いじめを防ぐ道徳授業†
―教材の開発を中心に―

喜田村徳子*・上原　秀一**
宇都宮市立姿川中学校*
宇都宮大学教育学部**

道徳の時間で用いられる読み物資料には、いじめの事実を被害者の視点で描いたものが多い。加害者が主人公である読み物も有るが、加害者の心情を中心に追う内容や、現在のいじめの事実とはやや離れた内容のものが多い。このため、生徒が考え、話し合いたくなる授業を行うことは難しい。2006年と2007年に、加害者の視点でいじめの事実を描いた小説が数作出版された。その中の瀬尾まいこ『温室デイズ』（角川書店、2006年）を教材化し、授業実践を行った。

キーワード：道徳の時間、いじめ、『温室デイズ』、瀬尾まいこ

はじめに

中学校3年間で人間関係やいじめに悩む生徒は少なくない。多くの学校で「いじめ、悩みについてのアンケート」を実施しており、早期発見・解決ができる場合もある。

一方で、面倒なことや詮索されることを嫌がり、アンケートに何も書かない生徒もいる。実際、いじめの加害者、被害者を指導する中で、「周りで見ていた生徒」が多数いたと分かる場合が多い。

いじめをする生徒は、自ら「いじめは卑怯なことだ」と気付かないと、いじめをやめない。周りで見ている生徒は、止める勇気を持てない。

いじめの構造を検証することで、いじめをする子に「いじめは恥ずべきこと」と理解させ、「周りにいる子どもたち」を「いじめを止める子どもたち」に変えられるのではないだろうか。また、道徳の時間にできることは何だろうか。これらの課題に基づいて、本主題を設定し、研究を行うこととした。

本稿は、いじめの事実を描いた小説での授業実践・考察と、各研究者のいじめに関する考えを比較した結果を示す。（文責：喜田村、上原）

† Noriko KITAMURA* and Shuichi UEHARA**:
The moral education class to prevent bullying: focused on the development of materials
Keywords : moral education class, bullying, “Onshitsu Days”, Maiko SEO(the author)
* Sugatagawa Junior High School, Utsunomiya
** School of Education, Utsunomiya University

1. 資料の内容および資料選択の経緯

『温室デイズ』は、みちると優子、二人の中学生を主人公とした小説である。小学校時代いじめる側だったみちるが中学生になり、学級崩壊・学校崩壊を解決しようとして、今度はいじめられる側になってしまう。優子は小学校でみちるにいじめられていたが、それでもみちるを助けたいと思い悩む。みちるはいじめを受けながらも学校に通い続け、優子は別室登校を選択する、という対照的な生き方について、読者に問いかけているようにもうつる。

みちるはなぜクラスを変えようとしたのか。正義が正義として通らない学校社会の理不尽さが如実に描かれている。また、厳格なみちるの父親が、いじめられているみちるに気づき「平気なわけない。もう、あんな学校なんていくな」（98頁）と言う場面や、それでも登校を続けるみちるの姿は、現在いじめで苦しんでいる生徒のみならず、傍観者を含め、いじめる側へのメッセージとなり得る。

一方、非常に優しいが娘の本当のつらさを理解していない優子の母親、みちるがいじめられていることに気づかない、あるいは気づこうとしない、人気者で指導力もある担任教師が批判的にうつる。「教室でまともに戦うみちるには、誰も手を差し伸べないけれど、逃げさえすればどこまでも面倒見てもらえる。」（113頁）という優子の言葉は、作者からの問題提起であろう。また、自称「有能なパシリ」の斉藤は、自らパシリ役を買ってでることで、学級か

らいじめをなくそうとしている。斉藤こそ、学校が抱える課題の象徴である。

『温室デイズ』に、主人公みちるが小学校時代を回想する場面（11～12頁）がある。今回、この部分を教材として用いた。以下に該当箇所を引用する。

> 前川さんはピンク色のくまのプーさんのシャーペンを持っていて、それは私と同じ物だった。私はそんなこと気づきもしなかったし、どうでもよかった。だけど、それを見つけた女子たちが、「優子（ゆうこ）がみちるのまねをしているよ」と、告げ口をしてきた。どっちが先にそのシャーペンを持ちだしたのかは定かじゃないし、この辺りに文房具屋は一軒しかない。持ち物が重なることは珍しいことではない。「そんなの別にいいじゃない」そう言おうと思った。それが本心だ。だけど私は、みんなが求めている言葉を知っていた。そして、「それって、最悪。かなりむかつく」そう言った。後のことは、周りの子がやってくれた。
> 「みちると一緒だからさ、そのシャーペン捨ててくれない？」
> 私と一番仲の良かったカスミが前川さんに言った。
> 「何が？」
> 前川さんが戸惑っている間に、カスミとマユミが、前川さんの筆箱からシャーペンを取り出した。「みちるのまねするなんて、調子に乗りすぎだって」そう言いながら、カスミたちはシャーペンをゴミ箱へ突っこんだ。

「それって、最悪。かなりむかつく」みちるの一言で、みちるの友人カスミが優子のシャープペンシルをゴミ箱へ捨ててしまう様子が描かれている。その場面を道徳的事実として提示することで、生徒たちが様々な意見を出し、いじめに関する思考を深めることができると仮定し、授業実践に至った。

いじめの様子が大変リアルに描かれているため、どの学級でもこの授業を実践することがよいとは限らないし、危険な場合もある。また、この小説には登場人物の家庭環境や家族構成など、配慮すべきことも書かれている。筆者は勤務校の第2学年で授業を行ったが、授業前に学年主任、学級担任にも使用する場面を読んでもらい、実践が可能か判断をお願いした。

（文責：喜田村）

2. 授業実践

(1) 授業の形態について

2学年生徒全員に実施した道徳に関するアンケートの結果から、道徳の時間に自分から意見を発表することは苦手であるが、級友の意見を聞きたいという生徒が多いことがわかった。和井内良樹・宇都宮大学准教授が考案したトリオグループディスカッション形式を取り入れ、生徒全員が発表できるようにした。

(2) 実践1－1～1－4

①指導案概要

> **ねらい：**いじめの事実を加害者、被害者両方の立場から観察させ、人間関係の構造とどのように関わっているか理解させる。同時に、いじめには、自主性のなさや無責任さも関係することに気づかせる。
> **学習活動：**
> (1) いじめの実態について話を聞き、課題を確認する。
> (2) 資料について確認する。
> (3) 資料を読んで考える。
> ①シャープペンシル事件でのみちるをどう思いますか。
> ②シャープペンシル事件でのカスミをどう思いますか。
> ③みちるとカスミを比べましょう。同じ所と違う所はどこですか。※実践1－3、1－4では、「同じ」所のみ発表させ、発表で出てきた言葉と、それらに関わる言葉「無自覚」「無感覚」「無神経」「無責任」について説明した。

②実践1－1の考察

優子のシャーペンが捨てられた件について、男子と女子の捉え方が異なっていた。男子生徒では「シャーペンを捨てるのはひどい。」が多数であったが、女子生徒からは「自分と仲の良い友達と自分の嫌いな人が同じ物を持っているのは許せないのはわかる。」という意見が出た。

発問①「みちるについてどう思うか」では、「みちるのしたことはよくないが、その気持ちには共感できる」という意見が多かった。

発問②「カスミについてどう思うか」を考える中で「カスミは本気でいじめたがっているのか」という新たな課題が生まれた。「みちるに気にいら

れるために。」、「いいポジションに立ちたいから。」など、様々な意見が出た。本心にしろ、そうでないにしろ、みちるやカスミのしたことで、優子が苦しんでいたことはまぎれもない事実であると、大部分の生徒が理解できたようである。

もう一つ注目すべき点は、「みちるは不良である伊佐瞬の後ろにいて、カスミはみちるの後ろにいる。」つまり、強い後ろ盾がいることで、自分も強い立場にいられるとか、「カスミは前川さん(＝優子)を利用して、みちるともっと仲よくなりたい。」、「カスミはみちるを利用して、前川さんをいじめている。」など、いじめと人間関係の構造を指摘した生徒がいたことである。

③実践１－２の考察

「みちるは『シャーペン捨てて』と言っていないのに、カスミがシャーペンを捨てるのはおかしい。」、「みちるの本心を知らないで、前川さんをいじめた。」というように、カスミがみちるの気持ちを勝手に解釈してシャーペンを捨てたことを指摘する生徒が数名いた。カスミなりの自分を護る術なのか、単純に優子をいじめたかったのか。いずれにしろ、カスミの、みちるを利用しようとする姿勢を生徒は感じ取ったようである。

④実践１－３の考察

みちるに関しては共感的意見が多かった一方、カスミに関しては批判的意見が多かった。

注目すべき点は「それって、最悪。かなりむかつく」の言葉の作用である。ある生徒はカスミがみちるからそう言われたことで、カスミは「前川さん（＝優子）をいじめなければ、自分がいじめられる」と不安にかられたと分析し、またある生徒はカスミがみちるにそう言わせることで、前川さんをもっといじめようとしていると分析している。これでは、優子のシャーペンが捨てられた件に関し、みちるもカスミも「自分が一番悪い」と思うはずはなく、「みちるにやらされた」、「カスミに求められたから」と自己弁護をするに違いない。これが、いじめの構造で最も恐ろしい問題点なのではないだろうか。

『温室デイズ』はみちるの語り口調で物語が進み(主人公が過去の自分を振り返り反省めいたことをする様子が『私たちの道徳』所収の「卒業文集最後の二行」と重なる。)、カスミの気持ちが描かれていないので、カスミがどのような思いでいじめを行ったのかをとらえるのが難しい。しかし、生徒たちが自分なりに想像し意見を交換することで、いじめの本質とは何か、考えるきっかけを作れたのではないだろうか。

⑤実践１－４の考察

「周りに流されないで、本心をきちんと言いたい」、「どんな理由があってもいじめはだめだ」という感想・意見が大多数であったが、中には「教師がいじめの事実に気づき、いじめをやめさせてほしい」、「いじめの起こり方や対処法はわかったが、効果は薄い」と、学校・教師側への課題を示した生徒もいる。いじめ問題に関しては、道徳の時間のみならず、教育活動すべてにおいて、生徒と教師が共に考えていく必要がある。

注目すべきは、「みちるのようないじめられない人のそばにいて、自分もいじめられないからと逆にいじめていて調子に乗っている」、あるいは、(実践１－２、１－３と類似しているが)「別にみちるはそこまでいじめに乗っている訳ではないのに、勝手にカスミが告げ口して、勝手にシャーペン捨てて、結局みちるが巻き込まれているみたいだ」という意見が出たことである。

学習指導案を検討する際、みちるとカスミには「忖度」の関係がはたらいていることに着目していた。終末に教師の説話として(好ましくない意味での)「忖度」の事実を入れることも考えた。しかし、この資料だけで生徒たちは十分ねらいを理解できるだろう（あるいは、この小説に勝る事例をみつけることが困難であった）という結論に至った。学習活動を通し、このような関係を、授業日前後に特に世を賑わせていた「忖度」というものだと気づいた生徒もいるのではないだろうか。数名の生徒が述べていた「空気を読んで」、「空気に流されて」と合わせ、いじめの構造を生徒たち自身が考える上で、重要な事柄になるであろう。

(3) 実践１－５

①指導案概要

ねらい：実践１－１～１－４に同じ。
学習活動：
(1)、(2)：実践１－１～１－４に同じ。
(3) 資料を読んで考える。
①シャープペンシル事件でのカスミをどう思いますか。
②シャープペンシル事件でのみちるをどう思いますか。
③カスミとみちるを比べましょう。同じ所と違う所はどこですか。※「同じ」所のみ発表させた。
(4) いじめの背景にある言葉について話を聞く。

②実践考察

発問①と発問②の順番を入れ替え、「カスミについてどう思うか」の発問を先に行った。すると、「みちるは自分の本心を言わなくて卑怯だ」「カスミよりひどい」「直接いじめることと同じくらい悪い」という、みちるを批判する意見が多数挙がった。実践1－4までは、「みちるのしたことはよくないが、その気持ちには共感できる」、「カスミはひどい」という意見が多かった。今回の実践で、みちるのした行為自体も十分悪いことであると、多くの生徒がとらえることができたのが大きな収穫であった。

相手の痛みに「無自覚」「無感覚」「無神経」「無責任」といったことの原因の一つが集団の中に発生する「空気」であるという説明を新たに加えた。この説明は概ね生徒たちに伝わったようである。しかし、あまりにも短い時間でとりあげたので、生徒一人一人に、十分時間をかけて考えさせる必要がある。

（文責：喜田村）

3.『温室デイズ』といじめの背景

授業実践を行い、「無自覚」「無感覚」「無神経」「無責任」の正体とも言える「空気」について考えるという、新たな課題が生まれた。ここでは、授業実践での考察と最近の子どもの実態をふまえ、いじめの背景にあるものについて、各研究者が言及していることと比較してまとめる。

(1) いじめられる側に原因がある？

『温室デイズ』にみちるの小学校時代の回想部分があり、いじめられている優子について、みちるはこのように説明している。

> 前川さんは家が金持ちで持ち物もしゃれていて、とにかくかわいかった。身体つきが華奢で髪もきれいで手足がすらりとしていた。それは彼女の長所であり短所だった。（略）子どもの世界では、好かれる要素にもなったし、いじめられる原因にもなった。どう転がるかで、大きく分かれる。特徴のある人ほど、うまく行動しなくてはいけないのだ。
>
> なのに、前川さんは失敗を重ねた。当番をサボる子を注意し、だめなことはだめと平気で言いはなった。誰も歌っていない音楽の授業で一人声を出し、体育の授業も全力で臨んだ。みんな、彼女を疎ましいと思いはじめていた。
>
> 教室の花瓶を割った生徒をちくった翌日、彼女はいじめられっ子になった。（8～9頁）

授業後の生徒の感想に「いじめている人も、いじめる理由があるかもしれないと思った。いじめられている人も、少し考えて行動すればいいかなと思った。」とあった。いじめられる側にも直すべき所があるという考えは間違っていると、生徒にしっかり理解させていかなければならない。

いじめの原因として「妬み」、「出る杭は打たれる」があることを、多くの研究者が指摘している。

①森田洋司氏、清永賢二氏

> 現代のいじめでは、（略）従来はプラスの価値づけを受け、いじめの対象とならなかった要素にまでスティグマ（＝烙印）化がおよんでいる。たとえば、真面目な子、正義感の強い子、成績のよい子がいじめの対象となる。『マジ（真面目）』、『チクリ（密告）』、『イキリ（目立つ）』などのラベルは、プラスに評価されていた特性をしりぞけ、非難の感情をこめて使われるいじめ言葉である。（『新訂版　いじめ－教室の病い－』金子書房、1994年、25頁）

②土居健郎氏

> いじめの加害者たちにはある種の妬みがあったと思います。（略）では、いじめた子たちに「妬んでやった」という意識があったかというと（略）これは疑わしいんです。（土居健郎、渡部昇一『「いじめ」の構造』PHP研究所、2008年、85～86頁）

③正高信男氏

> 欧米人に比べて、日本人は嫉妬深いといわれる。（略）「いい子ぶりやがって」という攻撃は裏返せば、その相手に嫉妬していることにほかならない。いい子ぶっているから、みんなで連携して攻撃したって許容されると正当化し、第三者にもアピールする。周囲もそういう心情を持っているんだという共通の素地ができあがると、いじめる側は後押しされているような気分になり、ますます強気になる。（『ヒトはなぜヒトをいじめるのか　いじめの起源と芽生え』講談社、2007年、75頁）

④森口朗氏

「今のいじめと昔のいじめは違う」という主張（私はこれを「今時のいじめ」論と呼びます）と、それに基づく「いじめられる側には何の問題もない。100％いじめる方が悪い」論には、致命的な弱点があります。

それは、いじめ現場の住人である子ども達から、全く支持されていないということです。（略）

「ジェントルハートプロジェクト」が13,000人の小中学生に行ったアンケート調査では、「いじめられても仕方のない子はいるか」という質問に「いいえ（つまり、いじめられても仕方のない子なんていない）」という答えは、（略）中学生で4割を切りました（毎日新聞、2006年11月7日）。（『いじめの構造』新潮社、2007年、30～31頁）

⑤竹川郁雄氏

アンケートで「中心になっていじめた」と回答している女子が一名おり、（略）「私はいじめは良くないと思うがやっている人だけが悪いんじゃないと思う。やる人もそれなりの理由があるから一方的に怒るのは悪いと思う。その理由が先生達から見てとてもしょうもないものでも、私達にとってとても重要なことだってあるんだから先生たちの考えだけで解決しないでほしい。（略）」

強調しておきたいことは（略）状況察知能力や状況適合性能力に劣る者への集合的排除が、いじめとなる場合があり、それがごく普通の子どもたちによって担われることである（『いじめと不登校の社会学　集団状況と同一化意識』法律文化社、1993年、117～122頁）。

(2)「そうするしかなかった」？

『温室デイズ』でみちるはこのように振り返っている。

かわいそうだ。こんなひどいことをしてはいけない。私は何回か思った。（略）だけど、誰もそんなことは口にしなかった。そんなことを言えば、自分が第二の前川さんになることは明らかだった（略）。前川さんをいじめる勢いが弱くなってくると、みんな次は誰が標的になるのか、はらはらしながら見守った。そして、標的が自分じゃないことが確定するといじめに参加する。その繰り返しだった。（9頁）

大庭健氏

「いまとなっては、酷いことをしたとは思うが、あれは私の力でやめさせようもなかった。あのときの、私の立場では、ああするしかなかった……。」これは、先の戦争で捕虜虐殺に手を染めた下級兵士の重苦しい懐述であった。ところが、これとまったく同じ言い方が、現代の若者の口から出てくることがある。いじめの加害者や、あるいは見て見ぬふりで通してきた少年・少女の口から、しかも相当の時を経て、こうした言葉が出てくる。（略）いじめと捕虜虐殺のあいだには、加害者の心理にかんして共通する面もある。とりわけ、いじめに加わらないと自分が標的にされるかもしれないという恐怖を感じて、いじめる側に回った子供の心理には、上官に命じられた下級兵士にも通じるものがあろう。（『「責任」ってなに？』講談社、2005年、174～175頁）

(3)「気づけなかった」？

①村山士郎氏（いじめ自殺事件において、見て見ぬふりをした生徒への指摘）

860人の生徒へのアンケートで約150人が「悩みに気づけなかった」と答えています。「気づけなかった」と記入している生徒は、（略）いじめの現場を知っていながら、いじめられていた少年が自殺するほど追い詰められていたことに「気づけなかった」と書いているのです。「自分（知っていた生徒――筆者〔村山氏のこと……引用注〕）も見て見ぬふりをしていて、これも立派ないじめと気づいたときは、本当に申し訳なかった。」

「見て見ぬふり」をしていた時の作者の気持ちがどのようなものであったかに向きあうことなく、その時にいじめられている生徒のことをどう考えていたのかもすっぽりと抜け落ち、「これも立派ないじめ」というように、ややオーバーな中味のない反省をしているのです。その時の自分の気持ちが空白なのかもしれません（『いじめで遊ぶ子どもたち　子どもたちに安心と信頼の生活世界を』新日本出版社、2012年、22頁）。

②NHK放送文化研究所・世論調査部政木みき氏（「いじめられているのを見た」生徒への考察）

回答のなかで群を抜いて多かったのは「何も

しなかった」でした。中学生で48％、（略）約半数が“見て見ぬふり”をしたというのです。（略）

今回、これまで減少傾向にあった『多数に合わせる』生き方が中学生で52％から61％（略）と大幅に増加しました。（略）

このようにいじめを見聞きしても半数が「何もしなかった」背景には、周りの空気を読む中学生が多数を占めていることがあると考えられます（NHK放送文化研究所 編『NHK　中学生・高校生の生活と意識調査2012　失われた20年が生んだ“幸せ”な十代』NHK出版、2013年、34～40頁）。

（4）いじめを楽しいと思う「無神経さ」

みちるはこのようにも回想する。

彼女（＝前川さん）をいじめることは残念ながら楽しかった。彼女の困った顔、うろたえる姿、それらを見ることには妙な快感があった。」（9頁）

①村山士郎氏

大津市A中学のいじめの加害少年たちは、自分たちのやったことはいじめではなく「遊び」だったと証言していると報じられています。（略）友だちとの「遊び」そのものがいじめ・いじめられ的な関係になっていることも事実です。（略）

今日のいじめは外から見ると仲良くじゃれあったり、いじったり・いじられたりしているように見えるのです。いじめられている子どもは、いじられキャラを演じているようにも見えます（前掲書、39～40頁）。

②鈴木翔氏（大学生へのインタビューの考察）

また、こうしたエピソードは、地位の高い「清楚系」グループに所属していたというモモカからも聞かれます。（略）

モモカ：プロフィール帳みたいなやつって流行りませんでした？

――：あー、女の子はあったね。

モモカ：そう、それ！そういうのめっちゃみんな書いてて、流行ってて、アタシの友だち（上位のグループの生徒）が、その子（下位のグループの生徒）にもなぜかそれあげて、「書いてー」って言って。んで、それでそしたら、その子めっちゃ嬉しそうにしてて。んで、アタシの友だちはそれを書いてもらった後に、なんかゴミ箱に捨てて（笑）。いじめとかではないんだけど、胸が痛んだっていうか。でもその（下位のグループの）子だから、アタシの友だち（上位の生徒）はそういうことやったんだと思う。やさしい子でしたから。

――：それいじめじゃない？

モモカ：いじめではない（笑）。（略）人間としてヤバって思ったんだけど、友だちは空気読んで、みんなを和ませようとしてやったのかなあって、そのときは思ったんですよ。たぶんアタシだけじゃなく、クラスみんなが。」（『教室内カースト』光文社、2012年、105～106頁　※――部分は鈴木氏の質問。ゴシック体、下線は鈴木氏による。）

③森田洋司氏（氏らが行った規範意識調査の考察）

この調査では、いじめの典型的な手口である「持ち物かくし」と「友達をからかう」ことについて、「悪い」ことだと認識しているかどうか尋ねている。「持ち物かくし」では97％の子どもが「悪い」ことだと認識し、「友だちをからかう」についても91％に達していた。

ところが、調査の結果、「友だちをからかう」は全クラスで確認されており、（略）クラスのほぼ全員がいじめは「悪い」ことだと意識していても、抑止力になっていないのである。

調査チームの島和博は、この矛盾を説明する一つの鍵が、いじめを「面白い」と感じている点にあると分析している。「持ち物かくし」については「悪い」ことだが「面白い」という反応が二割強、「友達をからかう」では四割強であった（『いじめとは何か　教室の問題、社会の問題』中央公論新社、2010年、123～124頁）。

④内藤朝雄氏（「イベントとしてのいじめ」と定義）

いじめの加害者たちが「どうしていじめたのか？」と尋ねられ、「面白かったから」「遊んでいただけ」と答えたのは、彼らが特に悪ぶっているからでもなければ、斜に構えて本音を隠したからでもありません。

彼らは「彼らなり」の「ノリ」の秩序に従って、本当に遊んでいるに過ぎません。（略）

いじめにおける「遊び」は、「ノリ」を生み出

し、維持する上できわめて重要な意味を持っています。いじめに耽る者にとって「遊び」とは、「俺らなり」の秩序に従いつつ、それを拡大再生産する、「道徳的」な行為です。

その「ノリ」が盛り上がるならば、どんな遊びも許されます。そして、集団内部での彼らの身分も、この「ノリ」の盛り上げにどれだけ貢献できるか、どれだけそのノリの主導的な位置にいるかによって、大きく左右されることになるのです（『〈いじめ学〉の時代』柏書房、2007年、172頁）。

⑤土井隆義氏（「対立の回避を最優先にする」若者たちの人間関係を「優しい関係」と呼んでいる）

現代のいじめを外から眺めていると、生徒たちのふるまいのどこまでが遊びで、どこからがいじめなのか見当がつきにくい。（略）ときには被害者の側もまた、その行為を楽しんでいるかのように見えることすらある。（略）

2006年に福岡県でいじめを苦に中学生が自殺した事件では、同級生たちから「きもい」「目障りだ」と言われつづけていたにもかかわらず、被害生徒はけっして笑顔を絶やさなかった。いじめていた側の生徒も、「笑っていたからいじめになるとは思わなかった」と弁明している。（略）

軋んだ人間関係は、表面的に馴れ合っているだけの「優しい関係」にとっては大きな脅威でもある。（略）いじめの外面を遊びのモードで覆うことで、その人間関係の軋轢を巧みに隠そうとする。（略）

「優しい関係」を営む子どもたちは、いじめて笑い、いじめられて笑う。傍観者たちもまた、それを眺めて笑う。（略）

被害生徒がいじめられてもにやにやと笑っていたことの含意もおのずと明らかになってくるだろう。（略）いじめの意味を遊びのフレームへと転化させ、自分を茶化してみせることで、（略）見るに忍びない自分のすがたを避けようとしていたのではないだろうか（『友だち地獄「空気を読む」世代のサバイバル』筑摩書房、2008年、30～33頁）。

（文責：喜田村）

4. いじめと「空気」の関連性

(1) 言葉と本心の違い

『温室デイズ』のキーワードの一つは「それって、最悪。かなりむかつく」である。みちるは「みんなが求めている言葉を知っていた」と弁明しているが、いわゆる「スクールカースト」で上位にいるみちるがなぜ、本心と違うことを言ったのだろう。

鈴木翔氏の『教室内カースト』によると、自分が所属するランクが「上」の生徒、つまり「1軍」（「イケてるグループ」とも呼ばれる）にも義務があり、みんなが黙っているときに発言し、場を和ませなければならないという。

ナナミ：いやなんか、先生がウケねらいにきたら、「はあ～？」とか言わなきゃいけなくて（笑）。そういうこと言わなきゃ的な空気が教室にはあるんで（笑）。言わなきゃ空気がよどんでしまうというか。「帰りてえんだけど～」とか。「マジだりいよ」とか、そういう。特に帰りたくはないんですけどね。（略）そういうこと言わなきゃいけないんですよ。大変なんです、「1軍」も。（略）

中2時の地位だけに着目すると、（略）小5から中2で中位から上位に変化（上昇）した生徒においては、キャラを演じている傾向が顕著に見られることがわかります。こうして考えてみると、「スクールカースト」は、下位の生徒のみならず、上位の生徒にとっても、学校生活を過ごすうえでの障害となっている可能性が見てとれるでしょう（前掲『教室内カースト』138～140頁※ゴシック体、下線は鈴木氏による。）。

(2) 日本人の気質

中根千枝氏の見解は以下のとおりである。

このあまりにも人間的な――人と人との関係を何よりも優先する――価値観をもつ社会は宗教的ではなく、道徳的である。すなわち、対人関係が自己を位置づける尺度となり、自己の思考を導くのである。「みんながこういっているから」「他人がこうするから」「みんながこうしろというから」ということによって、自己の考え・行動にオリエンテーションが与えられ、また一方（略）他人の考え・行動を規制する。（略）

往々にして感情的不一致が明白になったりすると、村八分にあったり、グループから脱落することを迫られたりする。（『タテ社会の人間関係』講談社、1967年、167～172頁　※下線は喜

田村による。以下同様。)。

(3) 空気に抗えない日本人

①山本七平氏

至る所で人びとは、何かの最終的決定者は「人でなく空気」である、と言っている。(略)

では、この「空気」とは一体何なのであろう。それは教育も議論もデータも、そしておそらく科学的解明も歯が立たない“何か”である。(略)空気の責任はだれも追及できないし、空気がどのような論理的過程をへてその結論に達したかは、探究の方法がない。だから「空気」としか言えないわけだが、(略) 非常に強固でほぼ絶対的な支配力をもつ「判断の基準」であり、それに抵抗する者を異端として、「抗空気罪」で社会的に葬るほどの力をもつ超能力であることは明らかである(『山本七平ライブラリー①「空気」の研究』文芸春秋、1997年、8～16頁)。

②冷泉彰彦氏

いじめや不登校の問題は「空気」の問題そのものだろう。(略) ある特定の生徒がいじめの対象になるのは、「抗空気罪」を犯したからであるし、不登校というのは、特定の「空気」に染め上げられた学校という空間から自分を防衛するための緊急避難であると思えば、ほとんどのケースは説明がつくのではないか(『「関係の空気」「場の空気」』講談社、2006年、142頁)。

③内藤朝雄氏

空騒ぎしながらひたすらノリを生きている中学生のかたまりは、無秩序・無規範どころか、こういったタイプの仲間内の秩序に隷従し、はいつくばって生きている。(略)

市民社会の秩序のように、規範の準拠点が、そのときそのときのみんなのこころの動きを超えた普遍的な水準にある場合、いじめをしている者たちの付和雷同は「悪い」ことだ。

それに対して、ここで問題にしているノリの秩序(**群生秩序**)では、共同生活のその場その場で動いていく「いま・ここ」が、「正しさ」の基準となる。(略)

つまり純粋形の**群生秩序**は、(略) 情動の共振から生じる秩序である。これを規範的な言い方で表すとすれば、「ノリは神聖にしておかすべからず」、あるいは「空気を読め」となる(『いじめの構造　なぜ人が怪物になるのか』講談社、2009年、31～38頁　ゴシック体は内藤氏による。)。

「空気」の問題は最近に始まったことではなく、日本人の意識として根深くあるものだとわかった。

子どもの世界で「空気を読め」ということは絶対的な「規範」であり、それを犯すことは、学校の規則を破ることよりもはるかに危険なことなのである。集団の空気に支配された中で、いじめの加害者や傍観者になってしまうのが現状である。

我々大人がその「空気」を壊すことはできるのであろうか。あるいは、子ども同士でこの息苦しさを何とかしようとすることはできないだろうか。

この事実をわかりやすく子どもに伝えることは、教師にできることの一つである。そのためにはまず、我々が事実を正しく理解しなければならない。

(文責：喜田村)

おわりに

授業実践で『温室デイズ』を使った一番の理由は、みちるも優子も、苦しいいじめ地獄をそれぞれの方法で生きのびたからである。今いじめで苦しんでいる生徒にとって、この本がいじめからの脱出方法を見出す手掛かりになるだろう。一方で、いじめをしている生徒にとっては、いじめの卑劣さを実感するきっかけになるのではないか。

道徳の授業では、今までのように一つの価値項目にとらわれるのではなく、子どもたちに様々な道徳的事実を提示することも欠かせない。考えさせたいことに必然性があれば、必ず子どもはついてくると信じ、日々の授業を行っていくことが大切である。

いじめを防ぐ第一歩として、「子どもたちと本気で向き合う」という気構えを持ち、子どもたちに教えていくことこそが、何より重要である。

(文責：喜田村、上原)

平成29年10月31日 受理

The moral education class to prevent bullying: focused on the development of materials

Noriko KITAMURA* and Shuichi UEHARA**
* Sugatagawa Junior High School, Utsunomiya
** Faculty of Education, Utsunomiya University